

タヌキモ属について

内山 寛
(広島大学理学部)

演者自身がこれまでに広島県内で見ることのできたタヌキモ属の種をカラースライドで紹介し、4種の染色体について報告した。染色体については他誌にて発表の予定なのでここでは要旨のみを述べる。

これまでに広島県内で見ることのできた種は、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、シロバナミミカキグサ、ミミカキグサ、ヒメタヌキモ、コタヌキモ、ノタヌキモ、イヌタヌキモの7種1品種である(分類の取り扱いは大井(1978)によっている)。これらの外にフサタヌキモが県内(大野町)で記録されているが、演者自身はまだ見たことはない。

3種のミミカキグサ類は県内各地の日当りのよい湿地に普通にみることができ、3種共に生育している場所も多くある。ホザキノミミカキグサは他の草本類と混生していることが多く、ムラサキミミカキグサとミミカキグサは裸地に生育していることが多い。そして、3種が同一場所にみられる場合でもムラサキミミカキグサが最も湿った所に生育しているようである。シロバナミミカキグサは豊平町志路原と大和町蔵宗の2ヶ所の湿地でみることができた。タヌキモ類では、ヒメタヌキモは西条盆地・世羅台地周辺のため池にみることができ、何ヶ所かのため池では開花もみられた(写真)。ヒメタヌキモの生態型については区別はしていない。コタヌキモは大和町蔵宗の湿地1ヶ所でみることができたが、そこは新産地である(既報、食虫植物研究会誌38:18-19)。ノタヌキモは世羅台地周辺でみることができたが、本種についてはすでに本会報(27:20)で報告した通りである。イヌタヌキモは県内各地のため池に普通にみることができた。開花株に関しては花は径約1cm、花茎は中実(central lacunae なし)で水中茎よりも太いこと、また、褐色で長楕円形の殖芽(冬芽)を形成することからイヌタヌキモとした。演者自身は特に殖芽の形態を重視したいと思っている。これまでに県内でタヌキモに該当するものはみることがない。

以上、これまでに広島県内で見ることのできたタヌキモ属の種について簡単に紹介したが、今後は調査の不充分な県東部の調査と標本を残すことをしたいと思ってい

る。

ムラサキミミカキグサとヒメタヌキモ、ノタヌキモ、イヌタヌキモの4種について体細胞染色体を観察した。染色体の観察には茎頂の細胞を用い、プレパレートは押しつぶし法により作製した。観察した4種共に、分裂期中期染色体の形態は球状で、長さが1 μ m以下であり、極めて小型であった。染色体数は、ムラサキミミカキグサ $2n=16$ 、ヒメタヌキモ $2n=40$ 、ノタヌキモ $2n=80$ 、イヌタヌキモ $2n=40$ であった。静止期(核)における染色体の形状は、染色中央粒(凝縮塊)の数における種間の差がみられた。ムラサキミミカキグサとヒメタヌキモ、ノタヌキモの3種はそれぞれの染色体数の約4分の1の数の染色中央粒を持っていたが、イヌタヌキモはそれを1個しか持っていない点が特徴的であった。



写真. ヒメタヌキモの花(東広島市西条町寺家日興苑団地内のため池)